

5. 「送骨」をめぐる問題（中間報告）

村上興匡（大正大学）

1. 個人化する葬送

従来、葬儀や墓は「家」と先祖祭祀の中で考えられてきた。高度経済成長期以前の一般的な葬式は、地域の中での「家」々の結びつきの中で行われてきたが、職住分離や核家族化、少子高齢化の影響によって「個人化」した結果、故人の最後の自己表現（一人称の死）や遺族のグリーフケア（二人称の死）の側面が強調されるようになった（「私」の死）。（葬送の自由化・個人化）

2. 墓と檀家の後継者問題

死が公的な性格を薄めたことにより、それまでの葬儀慣習を支えていた仏教寺院も公的な性格を喪うことになった。都市への人口流出によって市町村の消滅が危ぶまれる社会的状況の中で、地方では家じまい、墓じまいの動きが見られ、地域寺院の存立基盤が揺らいでいる（寺じまい）。

その結果、引き起こされている「お坊さん便」などの現象。寺院経営の現状、会員制の寺院、地方の人口減少と「寺院消滅」、後継者問題など。

3. 葬儀慣習、寺院の社会的位置をめぐる状況が凝縮して現れた問題としての「送骨」

- ①富山県の高山大法寺から始まったとされる「送骨」（孤独死した遺骨を廉価で永代供養するシステム：少子高齢化、弔い手のない葬儀）
- ②継承者を持たない人の終活の手段としての「送骨」
- ③インターネットを通じて全国的に広がっている「送骨」（地域寺院の檀信徒に変わる経済的支持者獲得の方策）
- ④愛媛県の「送骨」裁判事例：送骨を社会的に認めるか否か。を切り口として、現代におけるについて考えたい。（宗教行為と公益・収益事業の境界）

4. 今後の予定：愛媛県の裁判事例についての調査、検討。

昨年、原告敗訴の判決。営利的であることを認める。